

就職部

① 就職シーズンスタート

いまや2002年4月入社に向けての就職運動が始まっている。就職協定が最早存在せず、就職情報会社がいくら学生を煽っても、学生は2月の学年末試験を終わらせなければ、就職運動に本格的に取り組むことはできない。学年末試験そっちのけで就職運動にのめりこむ学生などは、企業は相手にすべきではないだろう。どうせ彼らは来年の卒業はほぼ駄目と考えて良いからである。したがって本格的な就職シーズンは、学年末試験が終わる2月下旬から始まるというべきである。

しかし、ここ数年の就職シーズンには、熱気のようなものが感じられない。これは学生だけでなく、企業も、一部の例外を除けば同様で、確固たる採用政策を持たず、単にスケジュールを消化しているだけのように見える。

② なぜ学生の熱気が感じられないか

学生の熱気のなさの原因は、少子化または一人っ子主義からくる両親の子供への過剰な圧力が、学生達の自主性と社会性を喪失させていることによるものと思われる。親の子供に対する圧力とは、就職選択における安定性を子供に異常なほどに求めていることであろう。このために子供(学生)には、就職選択力はなく、もっぱら

公務員が第一志望となる。彼らにとっては国家・地方公務員試験のための試験勉強が就職戦線であり、それ以外の選択肢はほとんどない。このことは、子供(学生)から、人と向き合う覇気を奪っていることに親たちは気付くべきである。

しかし、学生が民間会社にまったく興味がないというわけでもなさそうである。就職部にはコンピュータが就職活動をする学生のために備えてあり、この利用率は日増しに高くなっている。個人でコンピュータを持っている学生も少なくないだろう。彼らはインターネットを通じて、興味ある会社のホームページを呼び出し、そこに搭載されているエントリーシートに必要な事項を書き込んで、会社に応募する手続きをする。30社にエントリーシートを出したなどという努力家(?)もいる。しかし多くの学生の就職運動はここまでである。積極的にOBを訪ねて、志望する会社の仕事の中身、将来展望などを質問して、その会社にチャレンジする動機付けを行う努力はしない。エントリーシートの返事がくるのを待っている。結局30社にエントリーシートを出した努力は無駄骨だということに気付くが、その後は公務員試験の期日を待っている。

そもそも30社にエントリーシートを出すなどとい

病人達の就職戦線

就職部長 小島 康裕(法学部教授)

う行為が、勝算のある就職運動に結びつくはずはない。エントリーシートをどんどん出せというの、就職情報誌の宣伝に載せられているだけのことで、まともな就職運動とはいえない。一人が30社にエントリーシートを出したら、いわゆる一流会社には何万通のエントリーシートが届くだろうか。そんなものを全部読むほどの人員は、如何なる会社でも人事部には配置されていない。ほとんどの学生が、紙くずをセッセと書いているのである。ここに最近の学生の精神的傾向が現れているであろう。彼らは機械に接することは出来るが、人と向き合うことが苦手になってきているのである。エントリーシートは5枚でよい。それを出すまでにできるだけ情報を集めてそれを分析し、2月末には、学生の方からチャレンジすべき企業を選択し終えていなければならない。これが就職戦線における勝ち方である。

③ 企業の長期不況シンドローム

企業側の元気のなさには、呆れるばかりである。概して企業の採用活動は萎縮しているように思われる。就職協定もないし、学生も学年末試験が終わっているいまこそ、人事の採用チームが大学のキャンパスを歩き回っていても良さそうなものであるが、それらしい人影は見あたらぬ。これはおそらく多くの企業が採用経費を大幅に削減しているためである。長期不況に対応し、競争力を回復するためには企業がリストラを行うことは、

やむを得ないことであろう。しかし企業の将来を担う若い人材を発掘するための予算を減らすような企業には、明日はないのではなからうか。しかも不況とリストラにより新卒の採用員数は、全体として減少している。したがって優秀な学生でも就職運動は、バブルの頃よりは厳しい。だからこそ大学には、就職の内定をなかなかもらえない優秀な学生が大勢いる宝の山がある。この状況は企業にとっては人材確保の絶好のチャンスのはずである。ところが企業とくに大手企業は、採用担当者の出張旅費、新幹線の運賃とホテル代などをケチって、地方の国立大学から人材を発掘するための人を派遣しない。そのために学生の就職運動のための経済的負担は、巨額になっている。これが日本の企業であり、世界中から人材を集めようとしてスカウトを世界に配置するアメリカの企業とは天と地ほどの差がある。

要するにこの数年の就職戦線は、学生も企業もまったく元気がない。特に企業は重症のようだ。これをわたくしは長期不況シンドローム(症候群)と名付けている。特に企業は、自分がそういう病人ではないかどうかすぐに自己点検し、活発な人材発掘を日本全国で行うように姿勢を正してもらいたい。親の圧力に屈して元気がない学生も、企業から刺激を受ければ重圧を跳ね返す若さは持っていると思う。新潟大学就職部は、活発な企業をパートナーに持ちたい。

『首のリンパ節が腫れたときには』

保健管理センター助教授
青木 定夫保 健管理センターの
内科の健康相談に訪
れる学生の中には首のリン
パ腺が腫れていますとい

う訴えの人が少なからずあります。リンパ腺という言葉は、古い解剖学の名残で、何かを分泌する組織に類似していたので、『腺』という言葉が使われていましたが、今では分泌組織ではないのでリンパ『節』と呼ばれています。ちなみに扁桃も扁桃腺ではなくただの扁桃です。

首のリンパ節の腫れは、扁桃と同じく、風邪や細菌感染などで起こります。このような場合は、急性炎症に伴ってその防御のために腫れるので、自発痛や圧痛（押すと痛いこと）があるのが普通です。

ところが、昨年の暮れ頃から、風邪をひいて首のリンパ節が腫れていると思っていたのに、数日経ってもなかなか良くならないという患者さんが目立ってきました。リンパ節の腫れだけでなく、体がだるくて仕方がない、38 以上の熱が何日も続く、食欲がないなど、結構重い症状もあります。リンパ節も、首の両側に広い範囲に腫れていて、時には鎖骨の上にもしこりを触れます。圧痛はそれほどでもありません。

このような場合は、**伝染性単核症**という特殊なウイルス感染症が疑われます。この病気に流行があるのかわかっている報告がないのですが、最近新潟市周辺の病院、大学にもかなり患者さんが見られます。この病気は、**EB (Epstein-Barr) ウイルス**が原因でおこります。これまでの報告では、日本人の90～95%の人が、子供のころにごく軽い風邪症状かあるいはまったく無症状のうち（不顕性感染といいますが）このウイルスに感染して免疫ができていとされています。しかし、EBウイルスは免疫が成立した個体（既感染者といいますが）でも、体内のどこかに潜み、時々どこの粘膜に出てきます。最近の調査では、大学に入るまでに感染している人の割合は80%程度と低くなっている事がわかってきました。EBウイルスに未感染の人が、既感染者と接触すると、のどのEBウイルスをうつされて感染し伝染性単核症を発症するのです。単核症という言葉は、血液中に大きな核を持ったリンパ球が増えてくることに由来しています。ときには白血病と間違えられることもあるようです。EBウイルスの初感染の症状は、年齢が高いほど重くなります。感染は唾液などの**飛沫感染**によって起こりますので、顔

を近づけて話す、飲み物を回し飲みする、キスをするといったことでうつります。Kissing disease という別名があるくらいです。具体的に

身に覚えがなくても（？）満員電車やバーゲンなど人ごみでうつることがあると考えられています。

感染の機会があってから発症までは、4～8週間程度です。**発熱、リンパ節腫脹、咽頭痛**が主症状ですが、比較的重い

肝障害（急性肝炎様）が10%程度に見られます。4～8週間で大多数の人は自然に軽快しますので、治療は対症的のみです。肝障害や他の症状が重い人では入院が必要になります。ごく一部の人では、EBウイルスにたいする免疫応答がうまくいかなくて、重症化したり遷延化したり、さらに重い病気に進行したりすることが知られていますので治り難い場合には注意が必要です。最初にきちんと診断することが重要ですから、長引くリンパ節腫脹があったら医療機関を受診してください。EBウイルスの検査は血液で簡単にできますので、確定診断はそう難しくありません。またこの病気になるると、ペニシリン系の抗生物質にアレルギー反応（多くの場合は皮膚の発疹です）を起こすので、リンパ節や扁桃の腫れがあっても、安易に抗生物質を服用するのは好ましくありません。

悪性リンパ腫に代表される腫瘍性のリンパ節腫大では痛みがないのが普通です。悪性リンパ腫は若い人にも見られますが、内科的治療法が進歩しており多くの場合治療も可能です。いずれにせよリンパ節の腫れが気になる人は一度センターに相談においでください。

保険管理センター【五十嵐地区】

（本部庁舎西隣）

Tel.025-262-6243 Fax.025-262-7517

旭町分室【旭町地区】

（旧看護学生寄宿舎2階）

Tel.025-227-2040 Fax.025-227-0748

利用時間 / 8:30～17:00（土・日曜、休日は除く）